

エリザベス・グルネリウスの幼稚園教員養成課程における 学びに関する考察

—ペスタロッチ・フレーベル・ハウスに焦点を当てて—

A Study of Learning in the Kindergarden Teacher Training Course of
Elisabeth Grunelius
—Focus on the Pestalozzi-Fröbel-Haus—

近 藤 千 草
(Chigusa, KONDO)

1. はじめに

ルドルフ・シュタイナー（Rudolf Steiner 1861-1925）は1919年9月、ドイツのシュツットガルトに自由ヴァルドルフ学校（Freie Waldorfschule）を創設した。附属幼稚園については、シュタイナーがその設立を強く望んでいたものの生前にその実現は叶わず、附属幼稚園が設立されたのは1926年のことであった。シュタイナーの意志を引き継いだのは、エリザベス・グルネリウス（Elisabeth Marie Adelheid von Grunelius 1895-1989 以下グルネリウスと示す）である。グルネリウスとシュタイナーの出会いは1914年、グルネリウスが19歳の時であった¹⁾。グルネリウスはシュタイナーに会うために自らスイスのドルナッハに出向いている。グルネリウスのシュタイナーへの関心はどこで得たのだろうか。グルネリウスは、ドルナッハに出向く前に、ボンにある「コメニウス・ゼミナール」で児童心理学を専攻していた²⁾。その後、グルネリウスは人智学に感銘を受け、ドルナッハにシュタイナーを尋ねている。グルネリウスはコメニウス・ゼミナールでシュタイナー思想に出会ったのか、あるいは修了後であったのか、その真相は定かではない。

ドルナッハでシュタイナーとの出会いを果たしたグルネリウスは、1914年から1年半、シュタイナーのもとに滞在し、講義を受講したり、ゲーテアヌム建設の手伝いをしたりと精力的にシュタイナーの活動に関わった³⁾。その後、1916年にはドルナッハを離れ、ベルリンにある「ペスタロッチ・フレーベル・ハウス」という現在も存続する保育者養成校において二度目の学修をし、教師の資格を取得している⁴⁾。在籍中には保育所や幼稚園で働いていたことも示されており⁵⁾、保育実践を重要視した学修に取り組んでいたことが伺えるのと同時に、将来的にはシュタイナーの切望する附属幼稚園の設立を念頭に置いた、理論と実践との往還的な学びだった可能性もある。その真実は現時点では定かではないが、ペスタロッチ・フレーベル・ハウス修了後にシュタイナーが、自由ヴァルドルフ学校の教師として加わることを要請していることから⁶⁾、シュタイナーがグルネリウスの学びに期待をかけ、附属幼稚園の実現を託していたことが推察されるのである。

グルネリウスは二つの保育者養成校を修了した後、生涯を通じて向き合うこととなったのは、シュタイナーの教育思想に基づいた幼児教育であったが、コメニウス・ゼミナールやペスタロッチ・フレーベル・ハウスでの学修により、グルネリウスの幼児教育の基盤が形成されたことは十分に予測される。では、両校でグルネリウスはどのような幼児教育の基盤を修得したのだろうか。両校における学修内容や学びの特性を整理することにより、グルネリウスの幼児教育の根幹部が明らかになると思われる。コメニウス・ゼミナールに関する情報収集を試みているが、現時点において難航している。そこで本稿では、現在も保育者養成校として存続しているペスタロッチ・フレーベル・ハウスに焦点を当て、そこでの学修内容の整理を通し、グルネリウスの学びの軌跡と幼児教育の根幹を明らかにしたいと考える。

2. 我が国に残るペスタロッチ・フレーベル・ハウスに関する記述

ペスタロッチ・フレーベル・ハウス (Pestalozzi-Fröbel-Haus) は、ヘンリエッテ・シュラーダー＝ブライマン (Henriette Schrader-Breymann 1827-1899 以下、シュラーダー＝ブライマンと示す) により、1878年、ベルリンにおいて設立された幼児教育、幼稚園教員養成、労働学校、料理学校や託児所等、多様な学びを提供する総合的な教育施設である⁷⁾。施設は、子どもを対象とした幼稚園、託児所、養育院、また、教員養成課程も兼ね備え、当時の教育と福祉を中心とする大規模な学びの施設であったことが伺える。1878年 (明治11年) に設立されたペスタロッチ・フレーベル・ハウスの「幼稚園女教員養成課程 (Kindergartenerinnenseminar)」において、グルネリウスはおそらく1916年辺りから在籍し、1年もしくは2年制課程を経て1918年に教育指導者の資格を取得したと思われる⁸⁾。

ペスタロッチ・フレーベル・ハウスは、我が国においても関心の対象となっており、1930年代には文献に紹介が見られる。例えば、日本幼稚園協会の『幼児の教育』32巻7号 (1932年) には、女子学習院幼稚園の宇佐美敬が、「ペスタロッチーフレーベルハウス (在ベルリン)」のタイトルで、9月23日にペスタロッチ・フレーベル・ハウスを訪れたことを記している⁹⁾。宇佐美の文章によれば、幼稚園の他に「保母養成所」や「乳児預り所」があり、「實に大規模であると同時に實に大混雑であります」、「全體の建物は可なり大きなもの」¹⁰⁾ の記述から一大学園であったことが読み取れる。また、建物の階下は保育室になっており、少人数 (9人か10人) であること、そこに3人か4人の実習生が付いていることが記載されており¹¹⁾、実習の場としてすぐ近くに幼稚園があることがわかる。子どもたちの環境として、「遊戲はやゝ廣い部屋で、廿人計りの幼児が區割した一つ宛の砂場を持つて居ります」、「十時のランチタイムで、幼児はコゝアとパンを食べて居りました」、「食事前の手洗ひ場に、清潔な各幼児のタオル、コップ、齒刷牙のあるのはウインで見たものと同様であります」¹²⁾ と記され、当時の幼稚園での生活の様子を窺い知ることができる。また、保育者の養成所については、「高等女學校卒業後二ヶ年の修業であります」、「校舎は可なり廣い敷地で林のやうな木立の極めて自然な、のびゝした心地のする庭の、あちら、こちらに、先生と幼児が輪

を作って遊んでゐるのが、ちらゝと木の間がくれに見えます、其廣い庭の落葉を、白いエープロンをかけた、養成所の生徒がはいて居ります」¹³⁾と記され、養成は子どもの姿を間近に感じながら学べる環境であったことが伺える。また、修業年限は二年とされており、本記事からは、グルネリウスが2カ年修業した可能性が推察される。

1936年（昭和11年）の『幼児の教育』36巻4号には、内務省社会局事務官の谷口明三が、「二つの幼稚園」と題し、ジュネーブのルソー幼稚園とベルリンのペスタロッツ・フレーベル・ハウスの訪問記を記載している¹⁴⁾。ペスタロッツ・フレーベル・ハウスについて、「此のペスタロッツ・フレーベルハウスはドイツに於て最も古く創立せられたものであり、現在に於ては其の規模も最も大きく、事業も非常に好成績をあげつゝあつて、ドイツに於ける代表的なものと云はれてゐる」¹⁵⁾と示すと共に、規模の拡大の様子については、「この幼稚園は、その初め1876年、フレーベルの姪で且つ彼の生徒であつたヘンリエテ・シュラーデルブライマンの創意に依つて興されたものであつて、最初は八人の子どもとその保姆たる少女五、六人とを養成した極めて貧弱なものであつたが、現在では三百人の子どもと四百五十人の生徒と五十人の先生を持つ大規模なものとなつてゐる」¹⁶⁾と述べられている。ペスタロッツ・フレーベル・ハウスは、「將來保姆又は家庭の母となるべき人を教育しこれを養成する機関」と、「幼稚園とも云うべき部門であつて、子どもの保育を掌るもの」の二部門から成っていたとされる¹⁷⁾。さらに、保姆の養成については、「こゝは、保姆の養成、保姆に對して一般的な指導教育を施す教師の養成、保姆に對して手工等特殊の教育を施す教師の養成及び幼稚園に於て母代わりに幼児を育てる保育婦又は家庭に於て將來母たるべき者の養成等の四種の教程があつて、極めて専門的な組織と設備を持つてゐる」¹⁸⁾と説明され、それゆゑに生徒も「ドイツ國內からばかりでなく歐洲の各國から多數の留學生が派遣せられ、現在、約四百五十人の生徒を擁して歐洲の教育界に赫々たる名聲を馳せつゝある」¹⁹⁾と記され、海外にも影響を与える存在であったことがわかる。

倉橋惣三（1882-1955）による『倉橋惣三選集 第一巻』（1965）にも当時の新教育として、「ベルリンのペスタロッツ・フレーベル・ハウス」と題し紹介されている²⁰⁾。ここで倉橋は、ペスタロッツ・フレーベル・ハウスについて、「シュラーデル女史は、その叔父または恩師であつたフレーベルの直伝の幼児および母性教育を、さらに時代に應ずる事業力をもって、この館の豊富なる内容に態勢したのであつた。すなわち単に幼稚園のみでなく、社会性に富める各種の母性教養を以て、若い女性の精神と技能とを涵養した。従つて、ペスタロッツの名の加わつてゐる所以でもあり、現在の言葉を以てすれば、幼児保護施設であり、幼児保育施設であると共に、育児に関する家事教育の学校であり、社会事業家養成の学校であり、さらに、特殊教育にまで及んでゐる」²¹⁾と説明している。倉橋が特に注目している点は、「ここでは、教育と保護とが児童愛の中にどこまでも分離していないことが著しい」、「必ずしも全幼児に均一でないところなどは、いわゆる幼稚園と保育所との観念的区分に囚われてゐない」²²⁾ことであつた。

我が国に残るペスタロッツ・フレーベル・ハウスの情報に関する記述から、我が国にも影響を与

えた保育者養成校であったことがわかる。この学校を二カ所目の学びの場所として選んだグルネリウスは、どのような課程を修めたのだろうか。

3. ペスタロッチ・フレーベル・ハウスの創設と養成の特質

3-1. ペスタロッチ・フレーベル・ハウスの創設

ペスタロッチ・フレーベル・ハウスは、その名の通り「ペスタロッチ」と「フレーベル」という二大幼児教育者の名が付く教育施設であり、現在も存続する140年の歴史をもつ保育者養成校である。創設者は先に述べたシュラーダー＝ブライマンである。シュラーダー＝ブライマンと幼稚園の創始者フレーベル（Friedrich Wilhelm August Fröbel 1782-1852）は縁戚関係にあると共に、シュラーダー＝ブライマンはフレーベルに学び、フレーベル主義の幼児教育を展開した人物である²³⁾。フレーベルが重視した幼児教育は、女性の心情と子どもに対する思慮深い世話とが統一的になることであり、シュラーダー＝ブライマンもこの点を第一に考えていた²⁴⁾。シュラーダー＝ブライマンは、女性の職業適性として保育者、幼児教育者を「母性」の観点から捉えているが、「身体的母性（physische Mutterschaft）」²⁵⁾としてではなく、女性は精神的に母性を持っており、子どもの教育者としてふさわしい存在であることに信念を置いた「精神的母性（die geistige Mütterlichkeit）」²⁶⁾としての保育者を重視した。

このようなフレーベルの思想を根底に保育実践していくシュラーダー＝ブライマンであるが、1872年頃に貧しい労働者階級の子どものを対象とする「民衆幼稚園」の再建に携わるようになると²⁷⁾、次第にペスタロッチ（Johann Heinrich Pestalozzi 1746-1827）の思想にも共感するようになる。貧しい暮らしを余儀なくされる子どもたちの保育を行っていく中で、シュラーダー＝ブライマンは、ペスタロッチがノイホーフで貧民の子どもの教育を展開したように、ペスタロッチの教育を模範としていくようになる。特に、シュラーダー＝ブライマンが重視したのは、ペスタロッチの「居間の力（Wohnstubenkraft）」であった²⁸⁾。諏訪（2006）は、論考の註において、論文“Die Grundzüge der Ideen Friedrich Frobel's angewendet auf Kinderstube und Kindergarten” 1872 Henriette Shurader-Breymann を基に、「当時のブライマンにとって、幼稚園の設置に最も適した場所は『家と農場、園庭、野原、牧草地、森の中で機能しており、生活の要求の大部分を手に入れ、そして、家具職人、鍛冶屋、製粉製造者、パン屋のような、すなわち手工業の作業場が遠くなく、子どもが見つける機会を持ち、それらの職につくこともあり、そのような親密な関係の中に家庭的な生活があるところ』であり、幼稚園は、『台所のような小さな家庭的設備』でなくてはならなかった」²⁹⁾と説明している。このように家庭の重視はフレーベルにおいても『幼稚園』は、満足した個人生活、喜びにみちた国民生活、自由な国家生活および和合した人類生活の唯一の真の源泉である『家庭生活』、すべての身分および境遇の真の『家庭生活』を、一般的に向上させ純化させるための、明瞭に遂行し美しく表現するための最も確実な手段、最も正しい方策、最も単純な方法である」³⁰⁾と述べられており、両者の保育観には共通性があると言える。シュラーダー＝ブライマンは、フレー

ベルの幼児教育思想とペスタロッチによる居間の教育とを結びつけ、家庭的な雰囲気の中で、家庭的な作業を行い、精神的母性を発揮できるような環境を整えて保育実践を展開していくことになる。

フレーベルとペスタロッチの教育観を融合させた考え方に基づくシュラーダー＝プライマン独自の教育観を生み出し、ペスタロッチ・フレーベル・ハウスは、1868年の幼稚園設立を皮切りに一大施設として形成されていく。諏訪（2006）によれば、ペスタロッチ・フレーベル・ハウスという名称が用いられるようになったのは、1881-1882年頃とされ³¹⁾、広告などの対外的な場面において使われたのは、1883年頃とされている³²⁾。この記述から、1868年の幼稚園設立から15年ほどの時をかけ、様々な施設が設立されたことで、施設全体に対して呼称されたことがわかる。施設拡大の過程の1878年に教員養成の施設が作られる。本施設においてシュラーダー＝プライマンは、どのような教員養成を行っていたのだろうか。

3-2. 「幼稚園女教員養成課程」のカリキュラム

シュラーダー＝プライマンにより創設された幼稚園教員養成施設である「幼稚園女教員養成課程」（Kindergartenerinnenseminar）は1878年に設立され、1890年には16歳から18歳までの50名の生徒が在籍していたが³³⁾、1894年には100名に倍増しており³⁴⁾、当時の人気ぶりが感じられる。課程は二部に分かれており、一部が「幼稚園と基礎クラスの教師の養成」、二部が「保育者の養成」であり、幼稚園教諭の養成は一部に当たり、二部は家庭で保育に当たる者、あるいは、正規の幼稚園教師の助手を目指す者の課程となっていた³⁵⁾。では、幼稚園教員養成課程のカリキュラムはどのように構成されていたのであろうか。岩崎（1995）には、教科カリキュラムと担当者が示されており³⁶⁾、ここでは第一部のみ抽出し、担当教員別に表に示したい（表1）。

表1 1883年及び1884年のカリキュラム

科目数	科目名	担当教員
1883年		
1	教育学（保健の基礎も含む）	シュラーダー＝プライマン
2	教育学と宗教の歴史	
3	幼稚園学	
4	教授法	
5	国民経済学の基礎	
6	慈善施設の訪問	
7	体操	フンベルト
8	女性の仕事の指導	

9	フレーベルの作業	シェッベル
10	幼稚園と授業クラスでの実際活動の準備	
11	幾何学	ベルトラム
12	唱歌	バオラート・ロスバット
13	スケッチと色彩	エルゼ・フォン・ブッセ
14	フレーベル作業の発展	レビ
15	家庭の作業	クララ・ヒルシェコルン
16	博物学	トリンスカ
17	ドイツ語、数学、文学、歴史などの補修講座	ゲルトルート・フォン・ブッセ
1884年から		
18	教育学	
19	教育学の歴史	
20	ペスタロッチーとフレーベルの著作の購読	
21	基礎クラスにおける教授学と実践	
22	フレーベル的作業	

1883年に17科目設置され、翌1884年からは5科目が追加されている³⁷⁾。1884年の時点では、22科目となり、ペスタロッチーとフレーベルの理解や幼児教育に関する原理や歴史、方法、内容、保育実践に関して幅広く学ばれていることがわかる。また、担当教員を見ると、1883年のカリキュラムでは、シュラーダー＝ブライマンが6科目を担当している。担当教員で男性だったのは、トリンスカ氏のみで、他は女性だった。諏訪（2008）は、シュラーダー＝ブライマンが生徒に高度な理論の習得を目指していたことを示す次の言葉、「幼稚園教員は、簡素な生活と行いを通して、最先端のあらゆる学問、技術、芸術が深く密接に結びつく中で発達する」³⁸⁾を引用している。シュラーダー＝ブライマンは、理論と実践との往還的な学びを重視していたことが伺え、グルネリウスもそうした学びを通し、幼児教育の基盤を培ったことが推察される。

幼稚園教員養成の礎を築き、自ら教壇に立ちながら教員養成に当たったシュラーダー＝ブライマンは、1878年の養成課程設立から21年後の1899年に没したが、20世紀に入ると、ドイツの教員養成に対する国家の規定が導入され、1911年には、「幼稚園教師と少年指導員養成のための、女子青年学校に編成された課程に関する諸規定」(Vorschriften für die an Frauenschulen angegliederren kreise zur Ausbildung von Kindergärtnerinnen und Jugendleiterinnen)³⁹⁾が制定される。本規定は、ドイツ全土における教員養成の質的均衡の保持のためであり、この時点における幼稚園教員の養成の目的は、「家庭と小規模な幼稚園において教師として従事するための資格を付与すること」⁴⁰⁾とされていた。本規定により定められた教育課程は、岩崎（1995）の「表 幼稚園教師養成課程と少年指導員養成課程の概要」に示されており、ここでは、幼稚園教師養成課程部分⁴¹⁾について引用

したい（表2）。

表2 1911年の法規定によるカリキュラム

教科		週時数
A. 理論的教科		
1	教育学	3
2	幼稚園の理論	2
3	博物（自然誌と文化誌）	2
B. 技術的教科		
1	運動遊びと体操	2
2	作業教授	5
3	裁縫・模型作り	2
4	裁断と図画	3
5	唱歌と音楽	2
C. 実践的活動		
1	幼稚園における活動	9
2	家事と庭仕事	2

本規定において教育課程は理論・教科・実践の内容で組み立てられ、その中でも実習に重きが置かれていることが週時数よりわかる。ペスタロッツ・フレーベル・ハウスは規定制定後に国家の認定を受け⁴²⁾、規定に沿ったカリキュラム構成を打ち立てていく。諏訪（2008）によれば、1911年のカリキュラムは表3の通りである⁴³⁾。

表3 1911年のカリキュラム

科目名			
教育学説	博物学	衛生保健学	歌唱
教育学	ドイツ語	体操	針仕事
教育学の文献購読	幼稚園学	スケッチ	運動遊戯
文化誌	青少年向け文学	スケッチ・模型作り・自由裁断	作業
公民	保育学	作業の授業	

法規定に基づきペスタロッツ・フレーベル・ハウスでは19科目を設定しているが、中には1884年当時と同じ科目（教育学・博物学・幼稚園学・体操・スケッチ・歌唱・作業の授業）も残されている。カリキュラムは、理論と実践とがバランスよく配置され、現在のわが国における教員養成でも

配置されている、音楽（歌唱）、図画工作（スケッチ、模型作り）、体育（体操、運動遊戯）も見られると共に、自由裁断、作業の授業、針仕事のように手仕事も多く配置されている点が特徴的である。しかし、1884年まであった「フレーベルの作業」、「フレーベル作業の発展」、「ペスタロッチとフレーベルの著作の購読」、「フレーベル的作業」といったペスタロッチ・フレーベル・ハウスに特有の科目は削除されている。1910年にはフレーベルの恩物は見られなくなり、「フレーベルの生き生きとした精神も消滅した」⁴⁴⁾と岩崎（1797）は記載している。フレーベルの思想に代わり、1913年以来モンテッソーリ運動が高まったことで、ペスタロッチ・フレーベル・ハウスもフレーベルとモンテッソーリの思想を融合した教育実践へと転換されていく。モンテッソーリの思想が入ってきたことにより、ペスタロッチ・フレーベル・ハウスは、福祉の性格が色濃くなっていくことになる⁴⁵⁾。グルネリウスがペスタロッチ・フレーベル・ハウスに学んだのは、おそらく1916年から1918年頃と推察されるので、1911年以降の課程を修めた可能性がある。ということは、シュラーダー＝ブライマンが1878年から実践してきたフレーベルの女性観と、ペスタロッチの居間の教育、家庭教育を中心に組み込んだ教育観に基づくカリキュラムというよりは、モンテッソーリの教育思想が反映された養成を受けていた可能性が高い。実際に、グルネリウスは、医学を勉強したいことをシュタイナーに告げる場面（“I wanted to study medicine.”）が示されている⁴⁶⁾。この「medicine」という言葉から、医学の道を進んだモンテッソーリの教育思想の影響を受けた可能性が考えられる。1911年当時の科目名のみでは、グルネリウスが具体的にどのような内容を学修したのか定かではないため、今後さらに追究したい。

規定公布後の養成課程修業年は、一年とされたが、これには条件が付いており、それは「国に認可された女子青年学校に最低一年間就学し、幼稚園指導の授業、ならびに教育学、宗教、ドイツ語、衛生学、保育および公民科の諸教科の授業に出席し、優秀な成績を修めた志願者」となっており、そのため、「実質的には、高等女学校卒業（満十五歳）後、二年間の専門教育を受けることになる」⁴⁷⁾と記されている。杉岡（2016）によれば、グルネリウスは、1914年に「コメニウス・幼稚園ゼミナール」を修了し、国家認定の資格を取得しているので⁴⁸⁾、修業年限は一年間であった可能性が考えられる。そうすると、1917年に入学し1918年に修了、1919年9月にシュツットガルトの自由ヴァルドルフ学校へと赴任する流れが考えられる。

時は進むが、現在のペスタロッチ・フレーベル・ハウスは、三年制の養成課程となっており、1995年の欧州連合による職業訓練を目的とする「レオナルド・ダ・ビンチ・プログラム」に則った教育課程を編成している⁴⁹⁾。池谷（2017）によれば、現在の教育課程は、教科構成ではなくモジュールが設定され、2011年度現在の教育課程では、5つの学習領域（Ⅰコミュニケーションと社会、Ⅱ社会教育的な理論と実践、Ⅲ音楽的と造形的な創造、Ⅳエコロジー（生態学）と健康、Ⅴ組織、法律、運営）から構成されている⁵⁰⁾。実習は44週に及び⁵¹⁾、実践が重視されているという点は草創期の状況と同様である。

入学の基準は、「社会福祉系の専門大学への入学許可に相当する資格」とされ、「社会福祉系の職

業環境で少なくとも8週間の実習経験をしたということを証明する書類が必要」とされ、中学校の卒業の場合は、「職業教育を受けたのち一定期間の特定の職業に就いていたという証明書が必要」となっている⁵²⁾。ペスタロッツ・フレーベル・ハウスに入学するには、福祉系の実習が条件となっており、モンテッソーリの教育観を引き継いだ養成校であることがわかる。

3-3. 養成課程における実践的な学び

シュラーダー＝ブライマンの教員養成構想は、実践的に学ぶ点にあると言っても過言ではない。現在のペスタロッツ・フレーベル・ハウスにおいても、実習は44週にわたっており、実学への期待が現在も引き継がれていることがわかる。実践的な学びのあり方を象徴するのが、「月間主題」(Monatsgegenstand)⁵³⁾という学びの方法である。月間主題とは、一カ月ごとに保育の主題を決めて、その主題を幼稚園の子どもたちの活動の中心に置くという方法である。この学びの意義について、『幼稚園における子どもたちの生活の組織化』は、幼稚園女教員にとって、学校風に積木の授業をしたり折り紙の授業をしたりすること等にくらべれば、はるかに困難であるが、フレーベルの『子どもたちに生きよう』の精神を体して実行にうつされるべきであった⁵⁴⁾とあるように、フレーベルの精神に則った子どもを主体とした学びの方法を取り入れていたことがわかる。また、『月主題』の構想と実践は、子どもたちを徐々に楽しい遊びから本格的な労働へとみちびき、たとえばえんどうの播種から収穫、料理までの作業を一貫して子どもたちにたどらせ、えんどうの生長を一貫して観察させ、さらにかかる体験とをむすびつけて図画や唱歌や話し方の指導をこころみることなどにおいて、注目すべきものである。それは、労働者階級の幼児に、労働の尊さとよろこびを体験させ、基礎的な労働技能をあたえ、いきいきした自然科学的認識の土台をすえ、有効な初等教育を用意し、協力の大切さなどを教えるものであった⁵⁵⁾と説明され、現代におけるアクティブラーニングを想起させる学びの方法と言える。グルネリウスは、養成課程においてアクティブラーニングを通して、幼児教育の礎を実践的に学んだということがわかる。

では、『月主題』にはどのようなテーマが選ばれ、どのように学修が展開されていったのであろうか。まず、月主題のテーマとして取り上げられる対象は、「1、季節および当該の月の特色的なもの、2、子どもの生活圏、3、個の生活圏から子どもたちに生じてくる活動、4、動物界または植物界からえらばれる個々のものは、それぞれの属を代表すべきである、5、植物、動物およびその他の事物のあいだの交替、6、事物の相互関係」⁵⁶⁾である。具体的には、梅根（昭和49年）⁵⁷⁾、及び橋川（2008）において⁵⁸⁾に示されているテーマを表4にまとめる。

表4 梅根（昭和49）及び橋川（2008）に示された月主題

月	梅根（昭和49年）		橋川（2008）
	第一年	第二年	一年間の月主題
1月	指物師	やまがらまたは他の鳥	いえすずめ、野うさぎとうさぎ

2月	馬と雀	いちやくそう	氷、雪、水、洗濯
3月	まつゆきそう	すみれ	魚
4月	鳩とえんどう	鶏卵、復活祭の卵	雌鶏、又はすみれ
5月	白樺	ライラック、すずらん	蜂、又はこふきこがね
6月	蜜蜂	牛、飼料、ミルク、バター、チーズ	毛虫と蝶、又は鳩の家
7月	穀物、穀粉、パン	水、水草	(休暇)
8月	収穫、菓子	魚、水草	蛙と蠅、又は牛
9月	りすとどんぐり	じゃがいも、澱粉	小麦、又はジャガイモ
10月	りんご	最初の暖炉の火	初火、又は猫とネズミ
11月	水、蒸気、氷	時計	リンゴ、又は大工
12月	樅または唐檜	樅	もみの木、通常のツタ、ときわ木

両者よりシュラーダー＝ブライマンは、動植物、植物や季節ごとの気候の特徴、生活上の作業等を取り上げていたことがわかる。月主題の学びは、「計画的なかつ科学的に考えぬかれた教育作業」⁵⁹⁾と述べられているように、教師による正確で緻密な事前研究と準備が必要となる。例えば、1月に「いえすずめ」のテーマが掲げられているが、教師はすずめに関して年齢ごとに指導計画を立てていく。4歳児では、すずめの食べるもの、体のつくり、鳴き声、尾の動き、飛び去る時、住み家、雛の世話、巣箱作り、動きの身体表現、観察した特徴の要約、詩の読み聞かせ等が取り上げられる⁶⁰⁾。5歳児の指導計画では、すずめに対する観察の広がり（鳴き方による表現の差や意味、意図ある動き、飛ぶ特徴、体のつくりと部位の名称、行動範囲、食べ物等）、詩の暗記、鳥の歌、観察できていない部分の確認と視点の導き等がある⁶¹⁾。現在でも教員養成において、教材研究は重要な課題である。シュラーダー＝ブライマンが重視する子どもとの対話の中で、子どもの観察力や洞察力を生み出し、動植物や物・事と人、生活との関わりを実感すると共に、後の科学的思考の基盤となるような学びの体系を構成できるよう養成されており、グルネリウスはこうした力を養っていたことが推察されるのである。

実践的な学びのもう一つの特徴は、実習にある。シュラーダー＝ブライマンが教員養成で目指していたことは、高度な専門的知識と技術を有し、生活に通じた実践力を備えた教員であり、このように目指された教員像は、前述したカリキュラム構成からも読み取ることができる。実践を重視した教員養成の実態について、我が国に反響を及ぼした当時においても、その特徴に気づく文面が見られる。例えば、1932年の『幼児の教育』において宇佐美（1932）は、「校舎は可なり広い敷地で林のやうな木立の極めて自然な、のびゝした心地のする庭の、あちら、こちらに、先生と幼児が輪を作つて遊んでゐるのが、ちらゝと木の間がくれに見えます、其廣い庭の落葉を、白いエープロンをかけた、養成所の生徒がはいて居ります」⁶²⁾と、このような光景は初めて見る美しい光景と記している。また、『幼児の教育』（1936年）に「二つの幼稚園」と題して寄稿した谷口明三は、ベス

タロッチ・フレーベル・ハウスの保育方針は極めて科学的で、設備の良く完備し、学修は、「園児を通して學問と實際との融合がこゝに展開されている」⁶³⁾と、理論と実践との往還的な関係による学修の特徴を示している。理論については、先に示したカリキュラムより、高度な学問体系を準備していることが分かり、また、実践の部分に関しても、1911年の法規定の「幼稚園の活動」が最も多い週時数となっていることから、実践の重要性を認識していることが伺える。しかし、実際に高度な理論の習得と実践力を備えた教員を養成することは困難であることをシュラーダー＝ブライマンは、「私の生徒の中には実践的に活動するのに適している女性は一人もいません」⁶⁴⁾と述べていることが岩崎（1995）の論考中に引用されており、現代とも類似した養成の課題を抱えていたことがわかる。

時を経てもペスタロッチ・フレーベル・ハウスにおける実習を通じた実践的な学びの体系は崩れることなく引き継がれており、現在の養成としての理念や方針、カリキュラムの格子については、ホームページより窺い知ることができる⁶⁵⁾。現在のスタロッチ・フレーベル・ハウスは、教育者向けのトレーニング施設、保育所や学校、児童や青少年福祉のための訓練施設等を持つ一大施設として構成され、教育者の養成コースには、専任課程（*erzieher innenausbildung im Vollzeitstudium*）とパートタイム課程（*Berufsbegleitende Erzieher innenausbildung im Teilzeitstudium*）が、それぞれ3年制6学期にて設定されている。3年の課程受講の後、国家試験を受験することにより教育者としての資格が授与される。専任課程の授業時間は月曜日から金曜日までの、週32時間である。養成の目的は、①子どもや青年の身体的、精神的な側面を助長し、社会における成熟した市民として仕事に仕えること、②法や制度を含む教育に必要な知識や技能を身に付けること、③時代の変化に適応した教育概念を開発すること、④教育のチームに関する全ての者と協働すること、を掲げている。

養成の内容は、①インターンシップの準備に関する事項、②実践施設との連携に関する事項、③養成2年目の実践の方向性と学問的志向に関する事項、④養成3年目の実践的な専門科目の学修を通じた専門性の獲得に関する事項、⑤異文化能力の開発に関する事項、である。中でも異文化能力の開発に関する事項は、ペスタロッチ・フレーベル・ハウスの特徴的な養成内容であり、学生の選択によって、海外で滞在をしながら学修するシステムとなっている。

パートタイム課程とは、教育実践を行いながら並行して科目を受講するシステムである。週に19時間半以上の実地訓練を行う契約を施設機関と交わし、授業は週2日8時間の受講が条件となっている。学修内容は、①専門的な概念と視点の開発に関する事項、②教育関係の構築と指導法に関する事項、③生活環境や多様性に対する認識や理解の促進に関する事項、④保護者や関係者とのパートナーシップの樹立と支援に関する事項、⑤関係諸機関の育成とネットワーク化に関する事項、である。

また、何らかの問題や課題を抱える者を対象とした教育者の養成課程も設けられている。貧困、ネグレクトや暴力等の虐待、トラウマ等に対する適切な支援と治療、早期発見と予防を実施できる

専門家の必要性が高まり、ペスタロッツ・フレーベル・ハウスにおいてもそのニーズに応えるべく養成課程を設置している。この過程の履修者は、現役で教育者をしている者に対する課程と実践を伴う科目履修課程があり、前者は、週に19時間半以上の実務を可能とする施設機関との雇用契約を交わす。後者は、週2日8時間の授業を受講することとなっている。養成の目的と学修内容は、前述の課程と同様である。

いずれの課程においても実習の時間が多く組み込まれ、シュラーダー＝ブライマンの創設以来、ペスタロッツ・フレーベル・ハウスにおける幼稚園教員の養成は、理論と実践との融合を図った学修体系を構築していることがわかる。グルネリウスが在籍したと推測される1916年から1918年頃の動きについて杉岡（2016）は、「1年間を過ごすことになったベルリンでは、民間託児所（privater Kinderhort）で働いたり、社会福祉事業へ参加したりした」⁶⁶⁾と記述している。現在のペスタロッツ・フレーベル・ハウスにおいて多様な形態において実習が展開されているように、グルネリウスが在籍した時代にも実践が重視され、多様な施設機関において実習に取り組み、実践知を積み重ねる学びを構築していたことが推察される。

4. まとめ

自由ヴァルドルフ学校の附属幼稚園を設立したエリザベス・グルネリウスの幼児教育の原点を探るべく、二度目の学び舎となったペスタロッツ・フレーベル・ハウスに焦点を当て、当時の学修内容からグルネリウスの学びの特性を整理した。ペスタロッツ・フレーベル・ハウスは、ヘンリエッテ・シュラーダー＝ブライマンにより、1878年にベルリンにおいて設立された多様な学びを提供する総合的な教育施設であり、ドイツ国内はもとより世界的にも知られた養成施設であった。我が国においても、日本幼稚園協会が1932年（昭和7年）に『幼児の教育第32巻第7号』において女子学習院幼稚園の宇佐美敬が「ペスタロッツ・フレーベルハウス（在ベルリン）」⁶⁷⁾と題して記し、1936年（昭和11年）には、同じく『幼児の教育第36巻第4号』において内務省社会局事務官の谷口明三が「二つの幼稚園」⁶⁸⁾と題してジュネーブのルソー幼稚園とベルリンのペスタロッツ・フレーベルハウスの訪問記を残している。さらに、1965年（昭和40年）には、倉橋惣三が、『倉橋惣三選集第一巻』の中で、「当時の『新教育』」として「ベルリンのペスタロッツ・フレーベル・ハウス」⁶⁹⁾として訪問記を載せている。本稿では、ペスタロッツ・フレーベル・ハウスを我が国で最も早くに紹介した文書を調査するには至らなかったが、昭和初期には訪問記として報告され、いずれの文章にも幅広い事業と画期的な養成を行っている様子が述べられていたことがわかった。

フレーベルと姻戚関係にあったシュラーダー＝ブライマンは、設立当初、フレーベルの幼児教育思想とペスタロッツによる居間の教育とを結びつけた保育実践を養成の根幹としており、当初のカリキュラムにも「フレーベルの作業」、「ペスタロッツとフレーベルの著作の購読」といった科目も存在したが、1911年の「幼稚園教師と少年指導員養成のための、女子青年学校に編成された課程に関する諸規定」制定により、「A. 理論的教科」、「B. 技術的教科」、「C. 実践的活動」に構造化され、

ペスタロッツ・フレーベル・ハウスも1884年当時と同じ科目である「教育学・博物学・幼稚園学・体操・スケッチ・歌唱・作業」を残しつつも、諸規定に沿ったカリキュラムを構成していくこととなった。また、1913年以降のモンテッソーリ運動が高まったことも相俟って、ペスタロッツ・フレーベル・ハウスは福祉の性格が色濃くなり、フレーベルとモンテッソーリの思想を融合した養成へと特色を変えていった。

グルネリウスが在籍していたのは1916年から1918年頃であり、受けた養成は1911年の諸規定の制定により変革した後のカリキュラムであることから、フレーベル主義にモンテッソーリの思想が取り込まれたカリキュラムの中で学修したということがわかった。つまり、グルネリウスの幼児教育観には、モンテッソーリ教育観と福祉的な志向が反映されたものになっていることが推察されるのである。グルネリウスが30年に渡って積み上げたシュタイナーの教育思想に基づく教育実践の中にも、その学びが反映されている場面が残されていることが予測できる。実践の集大成の書である『七歳までの人間教育』（Early Child Education & the Waldorf School Plan.）⁷⁰⁾より、グルネリウスの幼児教育観と養成での学修との関連性を探っていききたい。

グルネリウスの幼児教育の根幹となっているのは、思想的基盤のみならず、学びの方法からその特徴を捉えることができた。すなわち、アクティブラーニングを通した幼児教育理解である。

「月間主題」からは、一つのテーマを深く理解する活動がなされ、詳細な観察から始まる動植物や現象の理解、詩や歌を用いてテーマへの関心を高める工夫がなされていた。さらに、自然科学的認識の土台と認識し、有効な初等教育へとつなげる配慮もなされていた。グルネリウスもこうした授業を受け、物事を詳細に観察する目を養い、保育環境の構成や指導法の工夫に生かしたことが推察される。アクティブラーニングのもう一つの特徴は「実習」を通した学びである。グルネリウスが学んだ時期の実習内容や時間配分等について、本稿では詳細に示すことはできなかったが、我が国に昭和初期に記載された訪問記を見ても、実習生が保育者と幼児が近くにいる環境の中に身を置きながら学修を進めている様子を捉えることができる。また、カリキュラムからも実習に関する時間数が多く配置され、重視されていることを読み取ることができた。現在のペスタロッツ・フレーベル・ハウスにおいても、実践を通した学びの系譜を引き継いでおり、週に19時間半以上の実習を行いながら、課程の履修も行うカリキュラムも見られた。グルネリウスも託児所や社会福祉施設で実践を伴いながら学んだことが杉岡（2016）に示されており、ペスタロッツ・フレーベル・ハウスの学修システムの中で実践知を高めていったことがわかった。

1918年にペスタロッツ・フレーベル・ハウスを修了し、教師の資格を得たグルネリウスは、翌1919年にシュツットガルトに向かい、自由ヴァルドルフ学校での教育に従事する。シュタイナーは、自由ヴァルドルフ学校の設立と共に、幼稚園の設立も切望していた。グルネリウスは、ペスタロッツ・フレーベル・ハウスでの学びを活かし、幼稚園設立に向けて精力的に動いていたのかもしれない。幼稚園の設立への動きは停滞していたが、1924年に自由ヴァルドルフ学校の教師であるヘルベルト・ハーン（Herbert Hahn 1890-1970）が幼稚園設立に動き出す様子が、“Fainnally in 1924,one

of the teacher, Herbert Hahn, heard Rudolf Steiner's call and decided to take up the challenge of having a kindergarden built on the school grounds.”と述べられている⁷¹⁾。グルネリウスが初めてシュタイナーに出会った1914年に、幼稚園を引き受けることは難しいと困惑していたが⁷²⁾、10年の月日を経た1924年には、幼稚園設立の実現へと向かわせていることから、ペスタロッチ・フレーベル・ハウスでの学びがグルネリウスの自信を生み出した転換点になった可能性がある。

本稿では、ペスタロッチ・フレーベル・ハウスの設立の流れに沿いながらグルネリウスの在籍した時代の学修課程の特徴を整理してきたが、教科内容や実習の詳細について調査するまでには至らなかった。学修内容の調査が可能となれば教育の質的な部分が見え、グルネリウスの幼児教育に対する価値がより明らかになってくると思われる。養成課程での学びの質がシュタイナーの幼児教育へとどのようにつながり、また活かされたのか検討することを次の課題としたい。

註

- 1) Susan Howard, 2005, The First Waldorf Kindergarten. The Beginning of Waldorf Early Childhood Movement, p.21
- 2) E・M グルネリウス, 高橋巖・高橋弘子訳, 1999, 『七歳までの人間教育 シュタイナー幼稚園と幼児教育』, フレーベル館, 裏表紙著者略歴
- 3) 前掲書1) p.21
- 4) 杉岡幸代, 2016, 「シュタイナー幼稚園の黎明期」, 『大阪キリスト教短期大学紀要』, 第56集, p.125
- 5) 前掲書4) p.125
- 6) 前掲書1) p.21
- 7) 岩崎次男, 1995, 『幼児保育制度の発展と保育者養成』, 玉川大学出版部, pp.154-155
施設の設立に関して注目すると、本書には次のような施設名と設立年が示されている。
幼稚園 (Kindergarten) : 1867年
幼稚園教員 (Kindergartenerinnen)・保母 (Kinderpflegerinnen) : 1875年
幼稚園女教員養成課程 (Kindergartenerinnenseminar) : 1878年
労働学校 (Arbeiterschule)・裁縫学校 (Strickschule) : 1877年
媒介学校 (Vermittelungsschule) : 1877年
女子ホーム (Mädchenheim)
料理学校 (Kochschule) : 1885年
託児所 (Krippe)・養育院 (Hort) : 1898年
- 8) 前掲書4) p.125
- 9) 日本幼稚園協会, 1932, 『幼児の教育』, 32巻7号, pp.28-31
- 10) 前掲書9), p.28
- 11) 前掲書9), pp.28-29
- 12) 前掲書9), p.29
- 13) 前掲書9), p.29
- 14) 日本幼稚園協会, 1936, 『幼児の教育』, 36巻4号, p.7
- 15) 前掲書14) p.9
- 16) 前掲書14) p.10
- 17) 前掲書14) p.10
- 18) 前掲書14) p.10
- 19) 前掲書14) p.10

- 20) 倉橋惣三, 昭和50年, 『倉橋惣三選集 第一巻』, フレーベル館, pp.210-212
- 21) 前掲書20) pp.210-211
- 22) 前掲書20) p.211
- 23) 諏訪佳代, 2010, 「シュラーダー＝ブライマンの「月間主題」に関する一考察」, 『日本ベスタロッター・フレーベル学会紀要 人間教育の探究』, 第22号, p.37
- 24) 前掲書7) p.155
- 25) 諏訪佳代, 2008, 「ヴィルヘルム帝政期ドイツにおける幼稚園教員養成に関する一考察—ベスタロッター・フレーベルハウスを中心に」, 『教育哲学研究』, 第97号, p.78
- 26) 前掲書25) p.77
- 27) 諏訪佳代, 2006, 「ベスタロッター・フレーベル・ハウスの設立理念と実践に関する一考察」, 『中国四国教育学会 教育学研究紀要』, 第52巻, 中国四国教育学会, p.54
- 28) 前掲書27) p.55
- 29) 前掲書27) p.58 注(12)
- 30) 小原國芳・莊司雅子監修, 平成6年, 『フレーベル全集 第5巻 続 幼稚園教育学 母の歌と愛撫の歌』, 玉川大学出版部, p.158
- 31) 前掲書27) p.56
- 32) 前掲書27) p.59 注(30)
- 33) 前掲書7) p.157
- 34) 前掲書7) p.159
- 35) 前掲書7) p.157
- 36) 前掲書7) pp.158-159
- 37) 前掲書25) pp.159-160
- 38) 前掲書25) p.73
- 39) 前掲書7) p.175
- 40) 前掲書7) p.175
- 41) 前掲書7) p.177 表7
- 42) 前掲書25) p.75
- 43) 前掲書25) p.75
- 44) 岩崎次男編, 1979, 『近代幼児教育史 幼児教育叢書13』, 明治図書出版, pp.41-42
- 45) 前掲書44) p.42
- 46) 前掲書1) p.22
- 47) 前掲書7) p.176
- 48) 前掲書4) p.124
- 49) 池谷潤子, 2017, 「ドイツ・ベルリンの保育者養成について—ベスタロッター・フレーベル・ハウスの養成カリキュラムを中心に」, 『千葉明德短期大学紀要』, 第37号, p.7
- 50) 前掲書49) p.8
- 51) 前掲書49) p.8
- 52) 前掲書49) p.7
- 53) 前掲書23) p.37
- 54) 梅根悟監修, 昭和49年, 『世界教育史体系21 幼児教育史Ⅰ』, 講談社, p.289
- 55) 前掲書54) p.289
- 56) 前掲書54) p.286
- 57) 前掲書54) p.286
- 58) 橋川喜美代, 2008, 「ベスタロッター・フレーベル・ハウスの教育実践と母性」, 『鳴門教育大学研究紀要』, 第23巻, p.114
- 59) 前掲書44) p.41
- 60) 前掲書58) p.115

- 61) 前掲書58) pp.115-116
- 62) 前掲書9) p.29
- 63) 前掲書14) p.11
- 64) 前掲書7) p.160
- 65) ペスタロッチ・フレーベル・ハウス ホームページ
URL: <https://www.pfh-berlin.de/de/startseite/das-pestalozzi-froebel-haus> (2019年11月19日現在)
- 66) 前掲書4) p.125
- 67) 前掲書9) pp.28-29
- 68) 前掲書9) pp.7-12
- 69) 前掲書20) pp.210-212
- 70) 前掲書2) p.2
- 71) 前掲書1) p.22
- 72) 前掲書1) pp.21-22

参考文献

- E・M グルネリウス, 高橋巖・高橋弘子訳, 1999, 『七歳までの人間教育 シュタイナー幼稚園と幼児教育』, フレーベル館
- 橋川喜美代, 2008, 「ペスタロッチ・フレーベル・ハウスの教育実践と母性」, 『鳴門教育大学研究紀要』, 第23巻
- 池谷潤子, 2017, 「ドイツ・ベルリンの保育者養成について—ペスタロッチ・フレーベル・ハウスの養成カリキュラムを中心に」, 『千葉明德短期大学紀要』, 第37号
- 岩崎次男, 1995, 『幼児保育制度の発展と保育者養成』, 玉川大学出版部
- 岩崎次男編, 1979, 『近代幼児教育史 幼児教育叢書13』, 明治図書出版
- 倉橋惣三, 昭和50年, 『倉橋惣三選集 第一巻』, フレーベル館
- 日本幼稚園協会, 1932, 『幼児の教育』, 32巻7号
- 日本幼稚園協会, 1936, 『幼児の教育』, 36巻4号
- 小原國芳・莊司雅子監修, 平成6年, 『フレーベル全集 第5巻 続 幼稚園教育学 母の歌と愛撫の歌』, 玉川大学出版部
- 諏訪佳代, 2010, 「シュラーダー＝ブライマンの「月間主題」に関する一考察」, 『日本ペスタロッチー・フレーベル学会紀要 人間教育の探究』, 第22号
- 諏訪佳代, 2008, 「ヴィルヘルム帝政期ドイツにおける幼稚園教員養成に関する一考察—ペスタロッチー・フレーベルハウスを中心に」, 『教育哲学研究』, 第97号
- 諏訪佳代, 2006, 「ペスタロッチー・フレーベル・ハウスの設立理念と実践に関する一考察」, 『中国四国教育学会 教育学研究紀要』, 第52巻, 中国四国教育学会
- 杉岡幸代, 2016, 「シュタイナー幼稚園の黎明期」, 『大阪キリスト教短期大学紀要』, 第56集
- Susan Howard, 2005, The First Waldorf Kindergarten. The Beginning of Waldorf Early Childhood Movement.
- 梅根悟監修, 昭和49年, 『世界教育史体系21 幼児教育史 I』, 講談社